

寄生するもの、されるもの

寄生生活の難しさ

寄生することは楽ではありません。繁殖すると宿主が減り、宿主に出会う機会が減ります。宿主から全てを奪うことは自滅の道です。どこまで依存するか、あえてその困難を選んだ生きものがあります。

1. セミヤドリガの幼虫

セミに白い綿のようなものがついているのを見たことがあります。これはセミヤドリガの幼虫が寄生し、体液を吸っているのです。1匹のセミに3幼虫もついていたこともあります。ある日、遊歩道で目撃できたヒグラシ24固体中、寄生されていたものは2個体で、そのうち1個体は2匹の寄生を受けていました。羽化したセミが木に止まった時に寄生しますが、セミの寿命が尽きないうちに成長する必要から、幼虫期間は6日間です。5齢で老熟するとセミから離れ糸を引いて下に降りて、やがて白い綿をまとった繭(まゆ)を作り蛹(さなぎ)となります。夏の終わりに羽化した成虫は樹皮に産卵し、孵化(ふか)は翌年の夏です。



寄生しているセミヤドリガ

ヒグラシに寄生が多く、アブラゼミなど他のセミではあまり見ません。ガの産卵場所がヒグラシの生息場所と重なり、取り付かれやすいようです。

タカラダニ:赤い外部寄生ダニで、昆虫にはよく付いています。関節などの軟らかい部分で吸汁しています。昆虫には寄生バエ、寄生バチ、菌類などの内部寄生も多く多難です。

2. オオバヤドリギ

シラカシやタブノキに、茶色の葉が違和感を与えている部分があります。サクラのどの落葉樹では冬に目立ちます。5月、実を食べた鳥の糞中の種子が、ネバネバによって枝や幹につくことで寄生が始まります。数mmある種子は栄養を貯え、初夏に発根します。しかし、樹皮の厚い場所に付いたものは、樹皮の下に寄生根が入り込めず、夏を過ぎると枯れてしまいます。つる性で、付着した場所から下側につるを伸ばして成長していきます。光合成を行う半寄生なのですが、宿主の細胞より水を得やすいくみを作っているため、水と養分を奪ってしまい、寄生を受けた枝は枯れてしまいます。



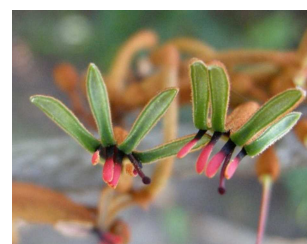
オオバヤドリギの芽生え

10月には、特徴のある形の花冠がたくさん落下していますので、その場所の樹木が寄生を受けていることがよくわかります。

暖地性の植物で、打吹山には温暖化にともなって増加していますが、主要な宿主であるタブノキなどの暖地林が消失した山口県や愛媛県などでは絶滅が心配されています。



オオバヤドリギ



オオバヤドリギの花